

人生最大の不運から生き抜こう

介護医療関連会社社長 春山 満



1954年生まれ。24歳より進行性筋ジストロフィーを発症、首から下は動かない。33歳の時、福祉のデパートをつくり、37歳の時、現在の会社(株)ハンディネットワークインターナショナル設立、社長。車いすの社長として、世界を舞台に活躍する。しかし20代前半は、父親の事業の失敗による借金苦、難病の発症と、非常に過酷なものでした。2003年、米国ビジネスウィーク誌にて、トヨタ自動車の張富士夫氏らとともにアジアの代表的な指導者として「アジアの星」に選出される。

父は不動産業を営んでいて家は裕福だった。24歳の時、手足の冷えを感じ、26歳の時に難病の進行性筋ジストロフィーと宣告された。オヤジが事業に失敗し家もとられてしまった。ガード下に小さな不動産業をはじめ、死に物狂いで働いた。病気を宣告されていたので車椅子に乗る前に準備をせねば・・・と時間との戦いだった。車椅子になったら押してくれる人が必要、そういう人が確保できる会社にせねば・・・

国立病院で進行性筋ジストロフィーと言われた後、病院で3～6ヶ月入院してくれといわれた。難病で薬も、処方の方もないと言われたのに・・・33年前のことです。仕事もあるし入院することは全てをた断ちきられてしまう・・・死の宣告と思った。そこでどうして入院するのですかと聞きましたら、医者は「あなたの病気は大変珍しいので、克明な検査をさせて欲しい・・・」ということだった。医者面白いサンプルになるのはお断り！・・・と捨て台詞をはいて診療室をでた。その時、医者は呆然としていた。その時、医療はブラックボックスで、おかしいと思った。

そこで医療と決別することを決めた。「なくしたものを数えるのではなく、これからの可能性にかけて残っている機能を120%いかそう！」と心に誓った。「絶望の時に希望が生まれる。豊かさが我々を弱めている」今、しゃべれるんですよ。考えられるんですよ。見えるし、聞こえる。素晴らしいんです。自分の失ったものは皆と協力し取り戻していこうと思った。

29歳の時に不動産業で大きな取引に成功し親父の借金もすべて返し第二の人生をスタートさせた。神様が恵んでくれたと感謝している。23歳の時、妻と知り合い、26歳で難病。次第に階段も昇れなくなった。27、28歳と自分を支えてくれた彼女と結婚した。まもなく自分は車椅子生活になった。

結婚後、妻が病院に行こうと言った。私はあなたを介護する為に結婚したのではない・・・と言われた。病院は不自由な人を専門にサービスするところなので情報があるはず・・・が妻の言葉だった。病院では予約の時間から3時間以上待っていたのに呼ばれず、問いあわせたことへの横柄な医者の返事に怒ってしまった。医療界は非常識の世界。医者にはサービスの意識がない。

昭和の61、62年頃、病院の収益はほとんど医療の必要のない長期入院患者でなりたっていた。皆、家族が引き受けず、年寄りの最後の生活の場になっていた。一人一ヶ月の診療報酬が75万円。一日あたり2、5万円。ホテルでも2、5万円の部屋が満室の所、ありますか？

自分ほとんどもないものをなくしたが、とんでもないサービスがあるのに気がついた。時代は高齢化の時代に入った。福祉介護の世界では、望まれているが提供されていないものが一杯あると感じた。この世界に入り25年間ひた走りしてきた。景気に関係なくやってきた。

大塚製薬の自動販売機が病院関係に入れず、提携した。自動販売機が一番低い所から屈んで飲み物を取り、車椅子のひと、妊婦、ミニスカートの女性には難儀。そこで日本ではじめてバリアフリーと名のついた自動販売機を出したら売上は180%あがった。二倍近い増・・・

トヨタ自動車は福祉車を手掛けていたがうまくいかず、業務提携をした。20年前のこと。福祉車の発想をかえてファミリーカーの発想にかえた。

ある時、自宅で妻に風呂に入れてもらった時、あまりに気持ちがよかったので「気持ちよく、風呂は人生のご馳走！」と言った時、女房の顔が曇ったのを憶えている。私を風呂に入れるのは女房にとって肉体的に大変！これは続けたらダメ！・・・と思った。在宅介護疲れでボロボロになっていく姿を見ているので・・・

13年前にオリックスに出会い、ライフワークの究極の住処(バリアフリー)づくりに入った。今のバリアフリーでは不十分だと考えている。一歩先のヒルト(HILT、ハーモニー イン リビング ツギヤザー)社会の創造を考えている。共に調和して暮らしていける生活が大事だと思う。

